

特集

“いのち”の大切さを伝え続ける助産師
——疫病と戦争が続くこの時代に最も必要なチャレンジ

今、この国の平均年齢がいくつかご存じでしょうか？なんと 47.4 歳なのです(総務省統計局、2021 年)。一方、出生数は過去最低の 865,239 人。10 年前からおよそ 20 万人減少しており、文字通り高齢社会なのです。

これに伴い、産科医院や病院の産科病棟の閉鎖が続いています。そのため助産院の閉鎖も続いています。医療法で助産院は緊急時に対応する囑託医療機関の確保が義務づけられているためです。

そんな中で、母と子と家族のための「いのちの授業」を展開して、ケアの技を伝授する活動をする助産師の活躍とその理念をご紹介します。



寺田恵子
助産師・めぐみ助産院代表/NPO 法人BS ケア理事長

てらだけいこ
1960 年熊本県生まれ。東京都立豊島看護専門学校、神奈川県立看護教育大学校母性看護課程修了。佐賀大学大学院医学系研究科修士課程看護学専攻修了。総合病院勤務の後、福岡県柳川市に「めぐみ助産院」を開設。赤ちゃんの母乳の吸い方に倣うおっぱいのケア「BS ケア」(Care based on the Breast-feeding Infants' Suckling Mechanisms)プロジェクトを主宰。九州大学医学部保健学科等で非常勤講師を務めている。著書『いのちの授業』(ライフサポート社)ほか。

み～んな、最初はめだか

「さっき、いのちが始まったときのお話をしましたね。いのちが始まったとき、どんな姿だったか覚えてますか。目はあったね～。手足は？ あ、しっぽみたいなものがありましたね。最初はみ～んな、めだかみたいな姿でした。いのちが始まったときは、今と同じ姿ではなかったんですね。お母さんのおなかの中で、短い期間で姿が変わっていきました」

授業では、卵から人へと変わっていく変化の様子を、力を入れて説明しています。命が始まったときは、人間の形をしていないと、子どもたちに強く印象づけたいからです。

人間は誰も、ただ生まれたまんまで素晴らしい存在。
何を持っているから偉いとか、何か足りないから劣っているなんて、後付けの価値には意味がない……。

生まれたばかりの赤ちゃんたちが、それを証明してくれています。

「人権を尊重する」なんていうと大それたことみたいですが、自分を大事に思う ように、相手を大事にする。それだけなんだと思います。

もし、誰もが「自分はとても素晴らしい存在なんだ」と気づけたら、自殺という選択肢を選ぶ人は減るかもしれません。

「目の前にいる相手もまた、素晴らしい、大事にしくちゃいけない存在なんだ」と思えたら、いじめや差別のない社会がやってくるかもしれません。

でも残念ながら、今の私たちの社会は、いじめや差別が当たり前のよう存在しています。

その根本原因を考えると、人と比較して優劣をつけるせいで



あなたが生まれた日の、みんなの喜びの笑顔が忘れられません(『いのちの授業』より。以下同じ)

はないかと思うのです。相手より優位に立ちたいから、相手との違いを見つけておとしめる。

人の体は、みんな違います。違って当たり前です。その違いは個性です。目が大きいから偉い、足が長いから優れている、なんてことはありません。形態が違うからといって、人間としての価値に違いはないのです。

当たり前のことですが、その当たり前のことが、私は分かっていませんでした。私が未熟だったために、1 人のお母さんを深く傷つけてしまったのです。

孝君の誕生

総合病院に勤務していた新人時代。私は幸子さんと出会いました。



幸子さんは、2 人目の赤ちゃんを出産するために、入院してきたのです。

経産婦さんでしたから、お産はどんどん進行していきました。あれよあれよという間に、子宮口は全開大に。抑制できないいきみが始まり、赤ちゃんの頭が見え隠れし始めました。そしてゆっくりと頭全体が出て、かわいいお顔が見えると、赤ちゃんは自分で横向きになりました。

いつものお産であれば、この後、私たちがサポートしながら肩を出して、体をズズ〜ッと引っ張り出します。そして、足が完全に出たところでお母さんにご対面。「おめでとうございます」となるのが一連の流れです。

ところが、このときは違いました。肩を出すと何の抵抗もなく、ズボッと全身が出てきてしまったのです。あまりにも速すぎる娩出だと思いましたが、赤ちゃんは元気に産声を上げてくれました。

赤ちゃんの全身を見たとき、ハッとしました。

のちに孝君と名付けられるその赤ちゃんには、両足がありま

せんでした。左腕はヒジまで。右腕はありましたが、指は 3 本でした。

想像していなかった赤ちゃんの姿に、私はぼうぜんとしてしまったのです。

そのとき、「包んで連れて行って」と、耳元でささやく担当医の声で、我に返りました。

「そうだ。とにかく今、お産直後の幸子さんに、赤ちゃんの体のことを伝えるわけにはいかない!」

私の頭にあったのは「どうか幸子さんが、赤ちゃんの異変に気づきませんように」ということだけでした。私は孝君を分娩用のシーツでくるみ、顔だけをのぞかせました。そして、幸子さんに「元気な赤ちゃんですよ」と対面させるとすぐ、新生児室へおあずかりしたのです。

幸子さんの苦しみ

幸子さんは、孝君と離されたままでした。担当医が、退院まで 2 人を対面させないと、方針を決めたからです。幸子さんのこと

を思ってではありません。病院側の都合です。

幸子さんの夫には、事実を告げていました。夫と担当医の間で話し合いはありましたが、夫は混乱し、どうしていいのかわからない心情のまま、病院の方針に従うと決めたのです。

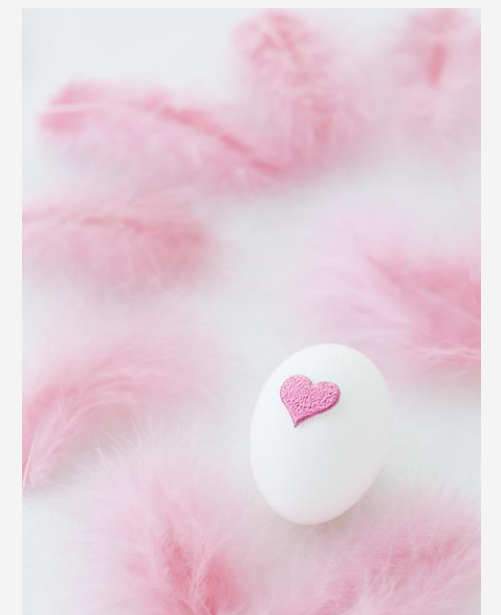
孝君のこと、知らせなくて本当にいいのだろうか……。自分の意見など通るはずもない新人助産師の私でしたが、思い悩みました。わが子に障害があることを幸子さんが知るときの苦しみを想像すると、胸が締めつけられます。

「幸子さんが孝君の体のことを知るのは、少しでも体力が回復してからのほうが いいのかもしれない」

そんな言葉で、自分の葛藤を抑えていました。

でも、「赤ちゃんは保育器に収容していますから」と、いつまでも孝君に会わせてもらえない幸子さんは、納得できるわけがありません。

出産後 2 日目の夕方、幸子さんが口



ビーで、私の帰りを待ち伏せしていました。誰に聞いても、孝君のことを教えてもらえない。孝君を取り上げたあの助産師なら・・・と、わらにもすがる思いだったのでしょう。

幸子さんは私に駆け寄ると、
「どうして赤ちゃんに会わせてもらえないんですか？
何があったんですか？ なぜ隠すんですか？」
と泣きながら詰め寄ってきたのです。
幸子さんは、孝君の体に 何かがあるのではないかと、薄々気がついているようでした。
私には、肯定も否定もできません。

「すみません、私の判断では、何もお伝えできません。
それよりも、赤ちゃんと会える日のために、今できることに力を注ぎましょう。赤ちゃんと会ったとき、おいしいおっぱいをあげられるように、準備しておきましょうね」と言い、その場を去りました。



「生まれてきてくれてありがとう」

私は逃げたのです。

私には、幸子さんの苦しみや悲しみを受けとめる度量は、あ

りませんでした。

幸子さんは結局、孝君と会わせてもらえないままでした。一生懸命搾乳し、毎日母乳を新生児室に届けてくれました。

幸子さんは産後の経過が順調だったため、退院日が 1 日早まりました。産後 4 日目の退院日、やっと孝君と対面したのです。

孝君を見て、ショックで取り乱すのでは？

そんな心配は、全くの杞憂でした。

幸子さんは、「かわいい」と孝君を抱きあげ、涙を流しながらギュッと抱きしめたのです。

「お母さんだよ。一人にしてごめんね。もう、大丈夫だからね」



幸子さんは先に一人で退院し、病院で経過を診る必要のあった孝君は、3 日遅れでの退院。毎日お世話に通っていた幸子さんが、孝君を連れ帰るとき、本当に嬉しそうでした。



あなたは、愛されるために生まれてきたんだと思いました



あなたはが生まれてきたあの日のこと、鮮明に覚えています

言えなかった「おめでとう」

幸子さんのお産以降、交代制勤務の中で、ただの取り上げマシンとなっていたそれまでの自分に対して「これでいいんだろうか？」と疑問に思うようになりました。

「自分の行動は、あれでよかったんだろうか。幸子さんに、何かできたことがあっ たんじゃないだろうか？」

悩む日々の中でやっと、「お母さんに寄り添い、お産をお手伝いする存在になることが助産師の役割だ」と、気づいたので

す。

その後、助産師の卒後研修で幸子さんの事例検討をする機会がありました。

私は幸子さんに対して助産師として何もできなかったと感じており、幸子さんの気持ちを伺いたくて、「分娩時の私の関わり方について、本当の気持ちを教えてください」と連絡をしました。

私が「きっこう思っているだろう」と想像していた幸子さんの



気持ちと、幸子さんの本音を、比較したかったのです。

幸子さんは、私にこう言いました。

「あなた方にとっては、障害のあるかわいそうな赤ちゃんだったかもしれませんが、私にとっては、本当にかげがえのない、大切な赤ちゃんです。私の子なんですから、真実はすぐに教えてほしかった。私は生まれてすぐの息子を抱っこしてあげたかったし、おっぱいも含ませてあげたかった。きちんと初乳を与えてあげたかったんです」

ショックでした。

あのとき、勇気を出して、「幸子さんは事実を知りたがってい

るし、赤ちゃんに会いたがっています」と、担当医に主張していれば……。かけがえのない、大事な時間を奪ってしまったと、今でも罪悪感が残っています。

そして、思い知らされたのです。子どもを産んだ母親が、どれほど自分の子どもを愛し、抱っこしておっぱいを与えたいと願っているかを。

もう1つ。

幸子さんは私が孝君を分娩用のシートでくるみお顔を見せたとき、「おめでとうございます」と言わなかったことに傷ついていました。

確かに言いませんでした。なぜ「おめでとう」と言えなかったのか。

突き詰めて考えると、私の心の中に、障害のある子に対する差別の気持ちがあつたことに気づいたのです。

「障害のある子の誕生が、おめでたいわけない」と……。

自分の中に潜んでいた、差別の心。

「障害のある赤ちゃん=不幸」という、低俗な価値観……。

私自身の人間観と、必死で向き合いました。

私は無意識のまま、人間の価値を「五体満足」に置いていたのです。

差別のない社会のために

自分の中にある差別の心は、私が成長する中で、徐々に身につけていったものです。

周囲の大人たちからの刷り込みもありました。

私のような、差別の心を持つ大人になってほしくない。

その思いから、授業で、「人間の体ができるまで」について掘り下げることにしたのです。

「最初、人はみんな、めだかだか幼虫だか、エビだかわからない形をしているね。ここから人の形になっていきます。人の体ができいく過程は、とっても複雑でデリケートです。そして、どういう形になると正しくて、どういく形になると間違えているか



わが子が生まれたときの感動を思い出すきっかけとなる＜いのちの授業＞

なんて、誰にも区別できません」

幸子さんは、最初「自分の妊娠生活の過ごし方が悪かったのではないか?」と、ご自身を責めていました。でもそうやって責めることが、孝君の存在を否定することになると、悩むことをやめたのです。

人間は誰もが、ただ生まれたまんまで素晴らしい存在。

生まれてきたすべての赤ちゃんが、「おめでとう」と祝福される社会。

〈いのちの授業〉が、その実現の手助けになればと願っています。

(『母と子と家族のための いのちの授業』P.152～165より)



『母と子と家族のための いのちの授業
——「生まれてきてくれて、ありがとう」を伝える
子育て』

B6 変型判 16,00 円+税

*単行本

<http://lifesupport-co.com/order29/books.html>

*電子版

<http://www.shinanobook.com/genre/book/2940>